

有限責任中間法人日本漢方交流会ニュース 金匱 No.29

編集
発行日本漢方交流会広報委員会
日本漢方交流会事務局 香川県仲多度郡琴平町225 TEI 0877-58-8581 FAX0877-58-8583
日本漢方交流会ホームページ <http://www.kanpou.com/>

第 37 回日本漢方交流会 全国学術総会 京都大会報告

京都漢方研究会 高橋 宏 和



去る、10月10日～11日、全国学術総会が京都で開催され、総参加者255名で、無事終了することが出来ました。前日の台風の影響で、東海、関東方面の先生方の参加が危ぶまれ、一部大変な思いをされた先生もいらっしゃいましたが、なんとか無事に、皆さん参加していただき、主催者一同、ほっと胸をなでおろしました。

今大会の特徴は、大会会頭に、聖光園細野診療所の理事長、細野八郎先生、大会委員長に、京都薬科大学の吉川雅之教授という布陣で、細野診療所と京都薬科大学の物心両面における強力なバックアップが、成功の大きな要因だと思います。会頭講演の細野先生、教育講演の山崎先生、シンポジウムの後藤先生、中田先生など日頃、京都漢方研究会の例会でお世話になっている先生方を中心に講演をお願いしました。その結果、京都と言える内容になったのではないかと思います。

会場は、京都薬科大学の愛学館の1～3階を使わせていただきました。この会館は、2年前に完成したばかりで、最新の設備がそろった、300名収容のホールが2カ所あり、1階は大食堂で、この建物の中で、市民公開講座、学術総会、懇親会の全てを行うことが出来ました。また、スタッフも、生薬学教室の先生方、学生さん、細野診療所の職員の方、京都漢方研究会の会員など、多くの人の協力で、大きな問題も起きず、スムーズに進行できたと思います。本当に、人にも設備にも恵まれ、無事学術総会を終了でき、実行委員一同、ほっとしています。

最後に、参加していただいた先生方をはじめ、ご協力いただいた全ての方に、深くお礼を申し上げます。

私の京都大会記

下 本 順 子



漢方に魅せられて約 10 年。そして日本漢方交流会全国学術総会に参加し始めて、かれこれ 9 回目になる。最近では勉強と、ちょっとした気分転換、

そして何よりこの大会を通して知り会った多くの方々に会えるのを楽しみに出席するようになっていく。

10 月、紅葉には少し早い“京の秋”に思いを馳せて新幹線に乗り込んだ。山科駅は京都のひとつ向こうの駅、下車すると数人の電車マニアがカメラを構えていた。何人の方に道を訪ねただろうか？ --- 京都薬科大学に到着した。早速白衣に着替え、若手研修会に参加。生薬の匂いの立ち込める中で中黄膏、ハンゲシャシントウの作り方を実習した。即席の斑編成にもかかわらず、アットホームな雰囲気の中で楽しく学ぶことができ、最後に斑全員の記念写真を一枚撮ってから、今大会のメイン会場へ移動した。「食物に薬のルーツを探る - 薬食同源」の市民公開講座、そして基調講演「張仲景医学の温故知新」と実に興味深い講座が続いた。扇状の会場は多くの聴講者で埋め尽くされた。快適で有意義な時間は瞬間に過ぎていった。夕刻、恒例の親睦会、ひたすら食べ、ひたすら愛嬌

を振りまいた。そして親睦会の最後を締めくくる研究会紹介、広島漢方研究会恒例の「瀬戸の花嫁」を合唱し特技のマジックで場を盛り上げた。

交流会の目的は一に親睦、二に勉強、いや一に勉強、二に親睦。どちらも大切である。京都の夜は更けていく、宿泊先に向かう途中で数人の先生方と合流し、役員でもない私が今年も新たに偉い先生方と知り合いになれた。

毎年こうして漢方の輪が広がっていく。嬉しい限りである。翌日は朝から盛りだくさんのプログラム。多くの先生方の会員発表、「浅田宗伯の観点から見た傷寒論」の教育講演、「漢方教育の現状と将来」について話された会長講演。臨床の観点、古典からみた漢方の観点、そして今後の漢方教育の行く末まで、一日で漢方における豊富な内容を一度に聴講できた。日頃、臨床の場にはない私にとっては、どの講演も聞き逃すことのできない実に貴重な内容であった。今年も例年同様満ち足りた面持ちで会場を後にした。今後の漢方に関わる自分の行く末は・・・？漢方の科学的解明に力を注ぐ研究部門か？それとも・・・！？大会後の自分への問いかけである。大会後、親睦を深めた先生方に写真を送った。暖かい言葉の添えられた返事が届いた。今も京都大会の余韻と共に私の机の上に置いてある。

訃報 宮崎綾子 先生



祭壇の宮崎綾子先生

宮崎綾子先生と九州漢方研究会について

平成 16 年 12 月 21 日、有限責任中間法人日本漢方交流会監事で九州漢方研究会副会長の宮崎綾子先生がおな亡くなりになりました。宮崎綾子先生は昭和 33 年 9 月、福岡の地に、九州漢方研究会が発足した時から 46 年間、講師、理事長、副会長として九州漢方研究会を引っ張ってこられました。

病気は数年前から有ったそうですが、今年の 4 月から特に悪化したとのこと。それでも、漢方研究会の例会や全国学術大会の前になると元気になられていたとの事で、宮崎先生にとっても日本漢方交流会や九州漢方研究会は重要な存在だった事が伺えます。又、「貝原益軒」や「香月牛山」等、漢方家とその考え方について熱心な研究をされて、香月牛山の「長命養生訓」を原本復刻刊行されています。

今回、九州漢方研究会は大きな柱を失う事になり、大変残念でしかも大変心細い状況となりました。宮崎先生も生前、新幹線等で一緒すると、いつも九州漢研のこれからの事を案じておられましたが、今後は残った者が力を合わせて、

宮崎先生に心配をかけない様にしなければと思っております。ご冥福をお祈りいたします。

平成 12 年 12 月 30 日

九州漢方研究会

理事長 金子吉一